

《どうでもいい話、その 379》

どうでもよくない皆様へ

こんにちは！

オジさん禁制のモスバーガーへ思案の末、突入を決意し押し入りました。

店に入ると大きなメニューが立てかけてあり、そこには、いろいろな種類のハンバーガー、飲み物、フライドポテトなどの写真が値段と一緒に掲示されています。なにしろ初めてなので、店内におけるルールはなに一つ分かりません。ルールを知らなければ、まごつき、赤面し、体面を失うことになり、これが一番こたえます。オジさんたちは、この体面を非常に大切にす種族だからです。

メニューを見てもどれを選んでよいのか分からず、客が並んでいるので列に加わります。列の行き先はカウンターで、いよいよ自分の番になり、うろたえて赤面していると、向こう側の制服姿のネエちゃんが「ここで食べられますか？お持ち帰りですか？」と聞きます。「あの一、エトエト、ここではなく、あそこのテーブルで食べさせて頂きます」とあわてて言うと、ネエちゃんは怪訝な顔をして「ご注文をどうぞ」と言います。そこでご注文を検討していないことに気づき、カウンター上のメニュー小型版を見て検討しだすと、後ろの人の「なにマゴマゴしてるの」という視線を感じ「うーん、もうなんでもいい」と、適当にハンバーガーとフライドポテトとオレンジジュースのメニュー写真をゆび指します。「ハイ、680円です」と代金が請求され、お金を払うと今度は、数字が表示されているTVリモコンみたいな機器を渡され「これを持ってお待ちください」といいます。「こ、これは、なんですか？」と聞くと「出来上がりましたらこのブザーでお知らせしますので、あちらへ取りに行ってください」とのことです。テーブルに座り10分ほど待つと機器のブザーが鳴りだし、止め方が分からずオタオタしながらカウンターへ行き、やっと食料の配給にありつけました。

そのハンバーガーの食べにくいこと、かぶりつくと、口の横からシルが出てズボンの上に落ちます。口の回りはシルだらけで悪戦苦闘し食べ終わると、後片付けも自分でしなければなりません。皆が持っていくところへ行くと「トイレはこちらです」との表示があり「へー、ハンバーガーショップは、こんな公衆の面前でオシッコをするルールなのか」と思ってよく見ると「トレイ」でした。（なにがトレイだ。お盆と書け！）と、捨てゼリフを小さくつぶやき店を出るのでした。

岩波より